

アルコール・薬物依存症者に対する YG 性格検査の有用性

— 心理的矛盾は行動変容につながる意味ある“悩み” —

早坂透 板橋登子 赤坂三恵 池田真理子 瀬底正有 岡田晋 中里容子 福永薫子 我妻優(神奈川県立精神医療センター)

【問題と目的】

近年依存症の臨床において、動機づけ面接法の有効性が示されており (Miller & Rollnick, 1991)、クライアントを突き放して“底つき”をただ待つのではなく、セラピストが積極的に介入し変化へと導く方法論に変遷しつつある。動機づけ面接法のキーワードとして両価性が挙げられている。その両価性を抽出することができる心理検査を用いることで、クライアントの洞察を深め、動機づけを高めることに役立てることができると考えられる。そこで、本研究では YG 性格検査 (以下、YG) の矛盾因子に着目した。

次に、行動変容の指標として、自助グループへの参加状況に着目した。依存症からの回復に、自助グループが有効であることが示されている (Krentzman *et al.*, 2010)。YG の矛盾因子と自助グループへの参加状況との関連を調べることで、依存症者の行動変容が起こるための準備性について探索することを本研究の目的とした。

【方法】

調査対象 依存症専門病院に入院した 85 名 (男性 54 名、女性 31 名) を対象とした。平均年齢は 39.12 歳 ($SD=11.12$) で、依存物質はアルコール 43 名、薬物 38 名、アルコールと薬物の重複 4 名。

調査時期 2014 年 4~11 月。

手続き 入院時テストバッテリーの 1 つとして YG を個別実施。

群分け 入院前および退院後 1 ヶ月の間に院外の自助グループへの参加がない者を「不参加」群、入院前には参加がなかったが退院後 1 ヶ月の間に参加があった者を「新規参加」群、入院前から参加していた者を「継続参加」群とした。群ごとの人数は、「不参加」群が 49 名、「新規参加」群が 23 名、「継続参加」群が 13 名。

矛盾因子の定義 八木・江口(1983)では、関連因子でスコアが大きく離れているものと説明するに止まり、明確な基準は示されていない。また、解釈においては個人内の相対的な位置関係を重視すると説明されているが、個人間比較には恣意性の統制が困難であると考えられる。したがって、本研究では便宜的に、領域を判定基準に 1 と 2 を「低」、3 を「中」、4 と 5 を「高」と分類し、6 つの性格因子群(情緒不安定性、社会的不適応性、活動性、衝動性、非内省性、主導性)の中で、1 つでも因子群内に領域の「高」、「低」に不一致がある場合を矛盾ありと定義した。反対に、因子群内の領域の「高」、「低」が一致している場合を矛盾なしと定義した。

【結果】

YG の矛盾因子の「不参加」群と「新規参加」群、「継続参加」群での発生率を χ^2 検定を用いた結果、それぞれ有意差が認められたため、残差分析を行った (Table 1)。

Table 1 YG 性格検査の矛盾因子と自助グループ参加の χ^2 検定の結果

		不参加群	新規参加群	継続参加群	合計
矛盾あり	n	20	15	2	37
	Adj	-0.6	2.5*	-2.2*	
矛盾なし	n	29	8	11	48
	Adj	0.6	-2.5*	2.2*	
合計		49	23	13	85

注) $\chi^2(2)8.698$ $p<.05$ * $p<.05$

自助グループへの参加状況を独立変数、YG の全 12 因子の領域を従属変数として Kruskal-Wallis 検定を行ったが、いずれも有意差が認められなかった。

【考察】

「新規参加」群の矛盾因子の出現率が高く、行動変容が起こる前に心理的矛盾を抱える者が多いことが示唆された。また、「継続参加」群の矛盾因子の出現率が低く、心理的に矛盾なく一貫した状態にある者が多いことが示された。心理的矛盾については、一見ネガティブな解釈をしがちであるが、この結果からはむしろ行動変容の準備性としてポジティブな捉え方ができると考えられる。自己矛盾を自覚しているということは、いわばクライアントが“悩み”、困っている状態にあり、動機づけが高まりやすい状態にあるとも解釈できる。YG はその“悩み”を可視化して提示し、クライアントとセラピストの間で共有しやすいメリットがあると考えられる。

また、YG の 12 因子の領域にはいずれも有意差が認められていないことから、治療目標として単一の回復像が存在するのではないと考えられる。したがって、クライアントの個性を尊重しつつ、パーソナリティのバランスの調整および調和を目指すことがセラピーにおいて有意義であることが示唆される。

以上、アルコール・薬物依存症者の理解に YG が有用であり、矛盾因子に着目することの有効性が示された。クライアントの理解のみに止まらず、介入に発展させるためにも、矛盾因子についてフィードバックを行った際の効果について検討することが今後の課題である。

キーワード：依存症、YG 性格検査、矛盾因子